

ヨゼフ会便り



発行者 ヨゼフ会 横浜市中区山手町44番地 カトリック山手教会内

第48号 2023年6月24日発行

Ⅰ 「恐れるな！」



横浜教区本部事務局

谷脇 慎太郎

ヨゼフ会の皆様にはいつも大変お世話になっております。早いもので司教館での務めも8年目を迎

えました。これまでも何度かヨゼフ会便りに寄稿させていただきましたが、今回は新型コロナウイルスの流行が始まった頃の2020年3月でした。ちょうど四旬節の始まりとともに教会活動も縮小され始め、その年の聖週間の典礼では司教、司祭のみで行われたことを思い出します。信徒の皆様はきっと動画配信を通して心をつなげて祈ってくださっていたと思いますが、世界中が同じような状況下に置かれたことは、教会の長い歴史を考えても初めての出来事だったのではないのでしょうか。

聖書には、「恐れるな」という言葉が繰り返し登場します。「人々を恐れるな」「体を殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな」「恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている」等々。恐れとは、自分が大切にしているものが何か大きな力によって押しつぶされていくところに起こる無力な人間の自然な反応です。恐れに襲われると、心はおびえ、生きる喜びは消えて、暗いやみの中に閉ざされてしまいます。コロナ渦の中では、「恐れ」が社会全体に広がり、ウイルスそのものに対してはもちろんですが、感染拡大の影響によって人々の間に生じるお互いへの不信感や怒りも広がって

たようにも思います。そしてこれにより、私たちの大切にしている信仰にも大きな影響を与えていたように思います。

数年前、私がチャプレンを務めるカトリック学校で高校生の授業をする機会があったのですが、そのとき取扱ったのが「恐れるな」というテーマでした。授業の準備をするときに、ある仏教の本を読んでいると「恐れ」について次のような言葉がありました。

「すべての恐れは、いのちの繋がりの中で生きているにもかかわらず、そのことを無視して、この自分がそれだけで存在していると考えるところから起きている。」

人間が自分一人の欲望やエゴイズムを優先させ、他人や自然のいのちに支えられていることを忘れる時に、恐れが生じるのだという指摘です。残念ながら、世の中には人と人とを引き離そうとする力が存在します。世界に目を向けてみると、このような力が、今回の新型コロナウイルスの影響で目に見える形で現れていたように感じます。例えば、大国が自国の利益だけを考慮してしまったり、相手の弱みに付け込んで自らが優位に立とうとしたりすることは、世界に大きな恐れと不安を与えています。また、個人のレベルでも、感染源となった国や、実際に感染してしまった人に対する誹謗中傷があったり、医療従事者に対する偏見があったりしました。このようなニュースを聞くたびに悲しくなりますが、一方で、このような中でも、人と人との繋がりを大切にしようと努力する人たちが多くいたことは、私たちに大きな希望を与えてくれました。

イエス様は日常の様々な恐れに対峙している私たちに対し、「恐れるな」と力強く語りかけています。神様はわたしたちの髪の毛一本一本まで知っておられる方、そして、一羽の雀にさえ目をとめられる方です。それほどまでに、父なる神様はわたしたち一人ひとりを大切な存在として考え、忘れることなく見守ってくださっています。ここには「恐れ」という言葉がもたらすあらゆる結果とは全く逆の世界があります。そこには愛があり、信頼があり、人へのやさしさがあります。私たちはキリスト者としてこのことを受け止め、困難な状況にあっても、希望をもって歩むようにと招かれています。そして、この神様のまなざしを、私たち自身も持つことで、世の中のあらゆる恐れをなくしていくことができるのだと思います。

¶ “今のICCは…”



浅場 聡也

ICCは、アメリカ、フランス、フィリピン、韓国、クロアチア、ポーランド、ベトナム、アフリカ諸国など様々な国の信者で構成されています。そして、彼ら多くは、仕事の関係で日本を離任されていく方、その後任で来日される方、彼らの訪日親族、また、観光のために来られた旅行者など多くの信者が山手教会の英語のミサに参列されています。ミサは、英語が基本となっていますが、月に一度、第3日曜日を **International Misa** と称して、第一朗読をそれぞれの国の言葉で朗読されています。

このように ICC は、信者の移動が多くあるため、毎回ミサの最後に初めて山手教会に来られた信者の出身国と名前を讀上げ、最後に全員で拍手で歓迎し、また山手教会の信者、特に転入者の方々に声をかけ親睦のためにピクニックと名打って、山下公園、根岸公園などでそれぞれの国の家庭料理を持ち寄り、教会外での新旧、また国を超えての交流を行って

ます。イースターの時には、みこころ幼稚園の園庭をお借りして、**Egg Hunting** を開催、また、クリスマスシーズンには、クリスマスパーティーを催し、サンタクロースに変装した信者の方が子供たちにプレゼントを渡したり、ゲームをしたりしながら楽しい催しも行っています。

コロナ禍でしばらく中止を余儀なくされていましたが、昨年の秋には、ピクニックを山下公園で総勢40名ほど集まり楽しい時間を過ごし、また、今年のイースターは、やはりコロナで中止していた **Egg Hunting** を開催し、多くの子供たちが楽しんでいました。今後は **with** コロナの環境の下、日本人の信者の方々とピクニック、色々なパーティーなどを開催して山手教会の共同体として活動していけたらと感じます。

また、毎月第1日曜日には、ダリル神父様がその月に誕生日、結婚記念日等を迎える信者をミサの中で祝福しています。

ICCは、将来の教会を担っていく子供たちを招きカテキズムクラスを月に2回開催しています。現在おおよそ20名ほどの子供たちが、年齢別に振り分けたクラスで相応のレクチャーを受けています。これも、以前は信徒館のいくつかの部屋を使用させて頂き対面で行っていましたが、コロナ以降現在まで **zoom** を利用してレクチャーしています。毎年初聖体を受ける子供たちがいますが、2023年は数名の子供たちが初聖体を受けることとなっています。さらに、教会への関心を高めるためにミサの奉仕活動に積極的に参加し、月に1回の子供ミサを行っています。

さて、コロナ、改修工事以前の英語ミサは、毎週教会聖堂に入りきれず、聖堂入口の階段のところも埋め尽くされるほどの参列者でしたが、コロナによって社会的に色々な制約が発表されたことにより、土曜日の英語ミサを毎週行うことで、400名から500名の信者を4つのグループに分け（土曜：2グループ、日曜：2グループ）、それぞれ決まった日にミサに参加してもらおう登録制にしました。が、登

録制を知らなかった信者(特に訪日旅行者など)にはこの情報が伝達できなかつたこともあり、当初はミサに参列する為に来られた未登録の信者の方々にお断りをしなければならない状況でした。また、聖堂改修工事に伴って、教会ホールでのミサとなり、更なる人数制限が強いられました。また、聖堂改修工事中の駐車場使用ができないことにも様々な意見がありました。

約3年にわたるコロナのパンデミック約9か月にわたる教会聖堂改修工事後、待ちに待った改修された聖堂でのミサ。それがついこの間の‘枝の主日’、



4月2日 枝の主日 英語ミサ

2023年4月2日(実際は4月1日から聖堂でのミサは行われました)でした。私は、聖堂内に入るや、清々しくまた安堵感を抱いたのを覚えています。主は、私たちすべての信者を心暖かく神の家である教会へとお招き入れて下さいました。これは、私だけが感じたものでしょうか? たぶん多くの信者も同じように感情を抱いたのではないのでしょうか?

復活の日曜日のICCのミサは、コロナ前のミサほどではありませんでしたが、それでも座席はすべて埋まり、出入口付近には立ってミサを受けられる方、さらには特設場として用意していた地下ホールに多くの信者が参列しました。

第8波より深刻な状況になるのではと懸念されている第9波が昨今話題となりコロナ感染状況がどのように推移していくか不透明な中、政府は5月にはコロナの位置づけを5類とすることから、私たちは今までの不自由な生活から解放されますが、一方、感染予防に注意を払うことを忘れてはいけません。しかし、それがあまり過度になってはいけないということも理解したうえで色々な行動をするべきでしょう。教会活動に関して言えば、コロナ対策を各自しっかりと取りながらコロナ前と同様にバザー、聖堂の大掃除、コーヒーサンデー、クリスマスキャロルなどの色々な活動を通して信者同士の絆を再確認できればと思います。

Ⅰ 雑感



平林 秀一

ご縁あって山手教会を母体とするボーイスカウト横浜第34団のスカウト活動に携わる様になったのが2015年の春、ほぼ時期を同じくして山本幸子先生の入門クラスで学び、諸先輩方のご指導のお蔭で(勉強不足で時期尚早ではないか? とのご意見もありましたが)、自然と導かれる様に、翌年の復活徹夜祭で洗礼を授けていただきました。残念ながら、その後クラスメイトのほとんどの方々はお見掛けすることがなくなりましたが、今でも、同期受洗の数名の方々が教会の様々な方面でご奉仕されていらっしゃるのを拝見する度に、個人的にとっても嬉しく思っています。

その後、団で一番年少の小学校1~2年生を対象としたビーバースカウト隊(BVS隊)の指導者を拝命して早7年が経過、ちびっこで泣き虫だったスカウト達が、今や、立派な中学生のスカウトに成長し、思い返せば感慨深く、長い様で、あっという間に時が流れ、毎年、新たに入隊する若いスカウト達との奇跡的な出合いに感謝しております。

こここのところ、加齢からか梅雨入り間近だからか、

何の前触れもなく身体のあちこちにガタがきて体調を崩し気味、嘗て薫陶を受けた大先輩が引退後の家族との貴重な時間を愉しむことなく他界した年齢が近づくにつれ、今秋の還暦を迎える迄元気でいられるか、ふと不安に感じることもある今日この頃です。

ここ数年のうちに両親が帰天（神父様、教会の皆様には大変お世話になり、深謝申し上げます）、まだ早いと言われるかもしれませんが、死を迎えるということが身近に感じられるようになり、いつ、如何なるかたちで訪れるともわからないけれども、神のみ手に抱かれ、永遠の安らぎが得られるであろう（希望です…）「その瞬間」に備え、残されたファミリーに手を煩わせることのなき様、引き継ぎマニュアル的なファイルを少しずつ準備しようか、スカウト活動の将来を担う若手後継指導者も発掘、育成しなければ等々、沈黙思考することも増えてきました（笑）

残された時間のなかで、今までできなかつたこと、これからなすべきこと、体力的な制約で困難であろうこと等に想いを巡らせていたとき、この度いただいた寄稿依頼の骨子のアイデアを練りながら「ヨゼフ会便り」のバックナンバーに目を通してみると、神父様、諸先輩方の貴重な体験談、珠玉の言葉などを発見、まさに叡智の宝庫だな！と、改めて感動した次第です。また、教会には多くの委員会の下、様々な機能を担う組織があり、それぞれに所属する多様なバックグラウンドをお持ちの信徒の方々がミッションを遂行し、この度の聖堂の修繕の様な困難なプロジェクトも成功に導いていかれたリーダーシップは素晴らしく、多くの人財に恵まれた素晴らしい教会でご奉仕させていただき使命をいただいていることは、とても幸せなことで感じています。

しかしながら受洗当時、既にヨゼフ会入会資格(?)の年齢に達していたからでしょうか、当時の石川会長にお声掛けいただき、メンバーに入れていただいたものの、会合とスカウト活動のスケジュールの重複、その後のコロナ禍の影響等、これまでの間、会のみなさまとの交流の機会に参加できていなかったことをお詫びしなければなりません。

梅村司教様の紋章に記された「COMMUNIO COMMUNIONUM」（交わりの中の交わり）を実践できる様、微力ではありますが、スカウト活動+αでお役に立てればと思っております。コロナ対策を徹底した上で、例えば、ワインに造詣の深い司教様、神父様をお招きするワイン会の企画、海外留学・研修へチャレンジされる神父様の壮行会の開催など、信徒のみなさまとの交流を深めながら一緒に楽しめるイベントや懇親会の検討を徐々に進めていくのも面白いと思います。

昨今、「多様性」（ダイバーシティ）という言葉が重要なキーワードの様に至る所で聞かれる様になりましたが、元々、同じ顔や姿の人は誰一人おらず、一人ひとりがかげがえのない存在であり、個人として尊重され、それぞれに幸福に生きる価値がある、ということと理解しています。ちょうど昨日、多様性の実現に向け一歩踏み込んだ違憲判決が出た旨の報道がありました。多様性はコミュニティーを彩り、組織を強くする大切な要素、世界中の全ての人々が神様の子供たちとして祝福され、平和で幸福な人生を送ることができます様、祈念したいと思います。



ボーイスカウト横浜第34団・
ガールスカウト神奈川県第85団
2023年度上進式、鈴木真神父様のご講話
(4月9日山手公園にて)

Ⅰ 亡き父を思う



青木 淳

2022年8月13日
父青木昭夫が眠るように
帰天いたしました。父は昭
和3年に鶴見で生まれ、当
時キンビールに勤めて

いた祖父の元、6人兄弟の三男として生まれました。両親ともカトリック信者で、鶴見教会で育っていきました。当時のミサはラテン語のミサで、侍者は子供達の勤めで、毎日教会に通って朝のミサを手伝うのが日課であったようです。終戦後、本牧の地に居を構え、はじめは末吉町教会にお世話になり、聖堂の復興などを手伝い、その後山手教会で過ごすようになります。米軍基地で働きながら、山手教会では、青年会のメンバーとして活動していたようですが、あるときサンモール修道院のシスターから「車の運転手がないのでアンドレ(昭夫)助けてくれない」と頼まれ、修道院付きの運転手になります。そんな教会中心の生活をしていた父ですが、母がカトリック系の看護大学に行ったのが縁で、山手教会で受洗し、どうやって父が言い寄ったのか、二人はめでたく結婚となります。それが昭和34年頃のことです。

翌年には長男も生まれ、修道院の薄給では家族を養えないと、日立戸塚工場で定年まで勤め上げます。人生の一段落つけた父は、休むことなく山手教会の雑用係として再就職をします。時は昭和50年代、まずは聖堂の下にあるボイラー室に父の倉庫兼事務所をかまえ、電気水道ガスの保守点検から、雨漏りの対応、植栽の管理など日々教会の環境を守るための仕事をし、ミサや祭事など子供の頃から身につけた知識を生かして、小教区にとどまらず、教区や修道会、幼稚園の仕事などをしていました。また、結婚式や入信者の講座の準備もやっていたので、多くの人にとって父は、最初に話す教会の人であり、結婚式や受洗までずっと併走する人でした。我が家には、見知らぬ人の結婚式の写真がたくさんあり、その写真の多くには感謝の言葉や結婚の喜びが添えら

れています。また、見知らぬ人の洗礼式の写真で父がツーショットで収まっている写真もたくさんあります。そんな、多くの人との交流を通じて父は、幸せな教会生活を送っていましたが、寄る年波には勝てず、十数年前に引退しました。



1990年代 結婚式での奉仕の一コマ

引退して、自動車の免許を返納したのをきっかけに、徐々に痴呆の症状が現れ始めましたが、なにしろ、生まれながらにぼけた性格なため、本当にぼけているのかわからない穏やかで、楽しい痴呆生活になりました。5年程前には、本人にとっては散歩、家族から見れば徘徊ということで、よく手分けして探しに行ったものですが、そんなときも、公園で見知らぬ子供達と楽しそうに話しているのを見かけました。やがて、徘徊すらままならず、帰天の年の5月はじめに近くの公園で倒れてから、ほとんど寝たきりの生活となりました。それからはベッドでの食事が多くなり、いつもは介助の時に「ありがとう」「わるいね」「なさけねえ」と言った言葉を交わしていたのが、ついには何も言わなくなり、食事を取らなくなったのが、亡くなる1週間ほど前、熱も続き、看取りの時がやってきました。鈴木神父様に来ていただき「病者の秘蹟」をおこなっていただきました。

介護の中心にいたのは母や末の妹、そして妻でしたが、家で看取ることの幸せを感じる時間でもありました。帰天の前日、何の不思議か、娘も参加して父に聞こえるかも知らないからと、父を囲んでとりとめもない話をしたのを覚えています。最後に部屋の電気を消す際に、私は父の頭をなぜながら「お父

さんありがとね。無理しなくてもいいからね」と声をかけました。翌日、母が私を呼びに来て「息をしていないみたい」といわれ、すぐに父の元にいきました。からだはまだ暖かくちようど朝の8時30分頃。父は、静かに帰天しました。



2010年頃 赤レンガ倉庫前の父母

父は94才の天寿を全うすることができましたが、子供や困っている人の笑顔を見るのが大好きでした。そんな父になれたのも、神様に会い、ずっと神様が父に寄り添って人生を歩んでくれたおかげだと思います。コロナのさなか、父の最期を気にかけてくださった、教会案内の皆様や多くの神父様、信徒の皆様には感謝の言葉もありません。父が、旧友と楽しく天国で語らっていることを信じつつペンを置かせていただきます。

¶ この3年間のこと



秋山 政幸

2022年4月に洗礼を受け、山手教会信徒の一員に加えさせていただきました秋山政幸と申します。どうぞよろしくお願

致します。横浜市南区の生まれで今もほぼ同じ所に住んでいます。

今年1月、前年に洗礼を受けたひとりとして何か書いてほしいとのお話がありました。なるべく目立たず、静かにやってきた身としては思わずお断りしてしまいました。多くの方の目に触れる場所に文章を載せるのはしんどいなと思いました。しかし2、3日考えるうちに、自分でもこの数年間を振り返って見たいと思いはじめ、お引き受けすることにしました。

20年そばにいてくれたネコさんにお別れをしたと思ったらコロナがやって来ました。勤め先からは自宅待機を命じられ、自由にできる時間が急に増えました。自宅周辺を散策することも増え、そのなかでこれまで気付かなかったことを色々感じました。

横浜の中心部は崖が多く、中には見ごたえのある所もあります。井土ヶ谷から保土ヶ谷に向かう坂道の左側(永田一带)はなかなか起伏に富んでいてまた車の通行も少なく、散歩にはとても良いところです。

崖が多いということは高台も多いということで、蒔田の「見晴し公園」は小さい公園ですが、眺めはよく、「みなとみらい」から横浜駅方面、また根岸湾も見え、印象的です。

南区中村町に「山ノ下公園」という場所があります。このほぼ垂直に切り立った崖を下から見上げると、なかなか迫力があります。



この崖の上近くに「唐沢公園」があり、途中で急な坂道を上らなければなりません。今でも散歩コースです。ここから横浜の中心部を眺めながらよく時

間を過ごしています。元幼稚園があった広場の隣には、幼子イエスを抱いたマリア像が高いところにあります。

散策の途中にはほかにも5体ほどのマリア像に出会いました。出会うたびに癒しを感じました。

私が中学生だったころ、ブルーコメッツというバンドがありました。小学6年から中学2年にかけて出たレコードはすべて買っていた記憶があります。今から2年ほど前、CD(ベスト盤)をある人からもらったのですが、サウンドの細部まで覚えていて驚き、また非常に懐かしく涙が出ました。そのなかに、「マリアの泉」という曲があります。苦しい恋に心いためた青年が町をさまよい、古い泉に出会うという内容の曲です。

今の自分は、苦しい恋に悩んでいるわけでも青年でもありませんが、心に重いものを感じながら町を歩いていると、何か重なる場所があったのでしょうか。白いマリア像は、出会うたび私のこころを癒してくださっているように感じました。

ある時、いつものように街を歩いていると右手にのぼっていく階段がありました。何気なくあがって行くと結構きつい坂道でした。やれやれ登り切ったと思目をやると教会があり、外からながめていましたが足は自然と敷地内に向かっていました。幸い(?) 誰にも会わずまっすぐ行って突き当たると眺めのいい高台でした。しばらく眺めてから引き返しましたが、白いマリア像があることには気づいていました。

数日後に再訪、聖堂の座席にすわりひとときを過ごしました。そこからままあって、山手教会の入門講座に参加するようになっていました。

あれから2年がたち、聖体拝領を受けて今帰ってきたところですが、ミサの前日になると今でもたびたび思うのですが、明日は教会かどうしようかなど。でも帰ってくると気持ちは軽やかです。

これから先どうなるのか分からず、思い悩むことも多いでしょう。ですが今ではいつもたどり着く言葉があります。

「すべては主の御心のままに。」

この間多くの方々のお世話になりました。お世話になった皆様ありがとうございました。

Ⅱ ヨゼフ会活動報告(3月～6月)

コロナ禍の鎮静化で教会活動の再開に伴い、ミサ奉仕活動以外のヨゼフ会活動も、5月14日の例会から再開いたしました。

・ 3月18日(土) : 四旬節黙想会

フィリピンに行かれる西村師を講師に迎え、ロザリオ会と共催で四旬節黙想会を開催しました。



・ 4月1日(土) : 教会ホールから聖堂へ移転作業

聖堂修繕が3月末で終わり、4月1日夜ミサから元通り聖堂でミサを行うことになり、教会ホールから聖堂へミサに必要な設備の移転作業を行いました。

・ 6月4日(日) : チャリティーコンサート

聖堂修繕の完成に合わせ、ロザリオ会・福祉委員会協賛を得て、イエスのカリタス修道女会 聖歌隊「スモールクワイア」のコンサートを開催、世界各地で続く紛争の終結を願い、「いのち」と「平和」をテーマにした曲を主体にした素晴らしい歌声に多くの聴衆が耳を傾け感動のうちに閉幕しました。アンコールでは教会学校の子供たちも一緒に歌いました。このコンサートは大変好評でしたので、再度演奏の機会を設けたいと思います。



・ 6月24日(土) : ヨゼフ会便り第48号発行

ヨゼフ会活動予定(7月～9月)

・ 7月9日(日) : 講演会

聖堂修繕の完了を記念し、聖堂修繕委員会主催、ヨゼフ会/ロザリオ会共催で「建築家スワガーとカトリック山手教会聖堂」というテーマで講演会を開催します。詳しくはチラシをご覧ください。

・ 9月30日(土) : ヨゼフ会便り第49号発行予定

会員消息

次の方が帰天されました。永遠の安息をお祈りいたします。

帰天日	洗礼名	氏名	享年
-----	-----	----	----

2022/12/16	イグナチオ・ヨゼフ	大島淳弘様	91歳
------------	-----------	-------	-----

編集後記

「紫陽花」先日曇り空の日、所用があり東京都北区飛鳥山公園に立ち寄った。駅前から高低差18mに昇るモノレール「アスカルゴ」に乗ったところ1分半の乗車時間の中で「こんにちは、地元北区滝野川出身の倍賞千恵子です」とアナウンスが流れ、降車後、色とりどりの「紫陽花」を愛でることができた。

その時、私は幼少の頃の母の記憶がなぜか甦った。29歳まで過ごした私の実家は北区赤羽岩淵で新河岸川と荒川、遠くにキューポラのある街川口を望む。

そういえば小学生の頃、「私はお父さんと一度も喧嘩したことがない」「倍賞千恵子のお父さんは都電の運転士だ」「私は季節で6月が一番好き」母から何回も聞いた記憶がある。ただ紫陽花が好きだとは聞いていないけれど買い物で駅前から実家の帰る途中に咲く青、紫、ピンクの紫陽花を目にしていたはずだ。

読売新聞からもらった家計簿、巨人ファンで負けると機嫌が悪い、何十年も使い古しているお父さんが買ってくれたという、がまぐちと化粧コンパクト。内職をしながら近所数軒の付き合いで子供4人育て幼少の頃、手はいつも荒れていたように思う。4人兄弟の末っ子の私。心配をかけたのは分かっている。

母は13年前90歳で亡くなった。紫陽花の花言葉、辛抱強さ、花期が長い、母の一生に似合うと思う。6月は水無月、もうすぐ夏至である。朝4時半には明るい。雨あがりの町を夜明けまで散歩して時には母を想い、この歳でまだ甘っちょろい自分を恥じ、途中咲いている紫陽花を愛でながら夏の香りを少しずつ感じ取ろうと思う。祈りのうちに。(坪井暢)